

日本民族の源流をたずねて

まつ
松ざき
崎ひさ
寿かず
和*

1. ま え が き

日本民族はどこからきたか、という問題は長いあいだ論じられてきたけれども、今日まだ結論らしいものはでていない。大きく分けて北方説・南方説だが、両説ともそれぞれいいぶんのあるところである。ざっとみただけでも、両説を裏づけるような資料があるわけで、それぞれの説の主張者はその点をことさら強調しているきらいがないでもない。しかし、日本民族の源流を尋ねるばあいには、小さな個々の点はいちおうそばにおいて、本筋はどこに求められるべきかということではなければならない。

それに、北方説、南方説がけんけんがくがくの論争を繰り返したのは、日本歴史がせいぜい3000年ぐらいと考えられていた時代の産物なのである。戦前、日本の歴史、つまり民族と文化の歴史は新石器時代以降と信じて疑われなかった。しかし、昭和23年、群馬県桐生市郊外の岩宿で旧石器が発見されてから、日本にも旧石器時代が存在したことが明らかとなり、単に石器だけでなく人骨も発見されるようになったのである。浜名湖周辺の牛川人（愛知県）、三カ日人（静岡県）、浜北人（静岡県）、帝釈観音堂人（広島県）などがそうだが、これらはいずれもいまから2～3万年前の旧石器時代末期のホモ・サピエンス（現生人類）なのである。

一方、大陸方面をながめてみると、中国では藍田人（60万年前）、北京原人（50万年前）をはじめとして、30万年、20万年、2～3万年前の人骨がぞくぞく出土していて、日本でもこれに相応する人類がいたことが考えられるようになっている。例えば、日本では瀬戸内海の海底をはじめ各地からナウマン象の化石が出ているが、ナウマン象は洪積世（氷河時代、旧石器時代）にすんでいた古代象の一種で、北京原人の発見された北京市周口店の猿人洞からも確認されている。そうすると、日本にも北京原人級の古さの人類がいてもよいことになるわけである。

日本の歴史は、いまや数十万年の古さにさかのぼるとおもわれるが、そのあいだには地形、気象、環境の変化があった。洪積世には北半球に4回大氷河期があったといわれているが、こうした氷河期には地表の水が氷結して海面が著しく低下した。そして、日本列島が大陸と地つづきにな

り、瀬戸内海も水がかれて平野化してしまった。人類も動物も自由自在に往来できたわけである。したがって、大陸にいたほどの人類なら、日本列島にやってきたことが考えられるのである。

ながい歴史を論ずる場合には、やはり自然を無視することはできないのである。

2. 縄文時代、弥生時代

日本に旧石器時代があったことは疑いないが、民族と文化が大発展をしたのは新石器時代以後である。いまから2～3万年前の旧石器時代末期、第4氷河期が終わって気候がぐんぐん暖くなり、水が豊富になった。このような環境のもとに発展したのが新石器時代の文化である。

新石器時代文化はまず縄文時代からはじまる。縄文文化というのは土器に縄目の文様があることからそう名づけられたもので、狩猟文化によって特色づけられる。真に農耕が発展したのは次の弥生文化時代からであって、縄文時代の人々は狩猟、採取を生業としていた。ただ、縄文時代になると、採取といっても、例えば、山の芋とか山菜を取るばあい、若い芋は大きくなるまで、果物は熟れるまでまつという知恵が働いたであろうから、農耕のめばえを縄文時代に求めてよいようにおもわれるのである。この時代の中期ごろになるとそろそろ米も食料にされるようになったらしいことが最近の花粉分析でいわれはじめている。

縄文土器はその源流が北ユーラシアの櫛目文土器に求められ、それがこの島に渡ってきて世界にも類のない発達をとげたのである。したがって、この時期の人類が北ユーラシアの人々と無関係でなかったことはいうまでもあるまいつまり、人類も土器も大陸から同時にやってきたのである。旧石器時代末期の人類として、北京の周口店洞窟から周口店山頂洞人というのが七体出ているが、この人類はたくさんの装身具をつくっている。この装身具と同じようなものを、縄文時代の人々もつくっているのである。したがって旧石器時代末期から新石器時代にかけては、人類も文化も大陸とそうかけ離れたものでなかったといえるようにおもわれる。

縄文文化はゆるやかな、やや停滞的な発展しかしなかったが、この間にも大陸からの人々の渡来はあったようだ。もちろん文化にも新しい要素が少しずつ加わっていった。

*広島大学名誉教授

特別講演

縄文時代の後期、晩期になると民族と文化の渡来はいちだんと激しくなっていた。とくに、晩期という時代は一大転換期であって、本格的な農耕文化の時代にはいるのである。それを刺激したのはもちろん大陸文化であった。

3. 民族の移動

縄文時代晩期、つまり紀元前7～8世紀のころから大陸では民族移動が激しくなっていた。黒海の北岸にいた游牧のスキタイ民族が東へ移動しはじめたのが原因であるが、スキタイ民族はギリシア文化の影響をうけ、独特の獣形銅器を発達させた。馬具とかバックルにその特色がよくみられる。このスキタイ文化は東アジアから日本にまで伝わっているが、これはスキタイ民族が直接やってきたと考えなくてもよい。ユーラシアの中央部には草原帯が展開しているが、ここには数多くの游牧民が住んでいる。かれらは、スキタイ民族の東への移動とともに押され押されて、そのいちばん東端にいたものは朝鮮半島に押しやられ、やがて海へ押しだされて日本島へやってきたのである。そのばあい、かれらは草原文化を同時にもたらした。草原文化の一つにスキート・シベリア文化とよばれる銅器文化がある。日本で発見されている青銅剣、多鈕細文鏡といった遺物がその余影である。竜形を配した鉄剣の柄頭等もそうである。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、朝鮮半島からの移住がことのほか多かった。縄文人はいったいに背丈が低い、弥生時代初期になると背丈が高くなる傾向がみられる。人類学者の金関丈夫先生が山口県の土井が浜遺跡で発掘された人骨の研究によると、朝鮮半島南部の人間との共通性がつよいということである。

日本と朝鮮半島とは一依帯水で、一つの文化圏を構成していたと考えてもよいほどである。したがって、同じ人間がいたとする金関先生の研究はたかく評価されてよいのである。

弥生時代を象徴するのは弥生式土器と磨製石器である。この土器は縄文土器のようにゴテゴテした文様がなく、ごく実用的な素焼土器である。これよりさき、中国では農耕文化の土器として赤色の紅陶と黒色の黒陶が黄河流域を中心に発達していたが、この二つの土器と弥生式土器とは無関係ではない。とくにそれらとのセットである石器にいたっては全く共通である。もちろん、そのような土器、石器は朝鮮半島でも発見されている。

弥生文化は紀元前後に発達した文化であるが、この時期、中国では漢文化が発達し、それが周辺の民族を開明していった。とくに、前漢の武帝は朝鮮半島を征服し、紀元前109年に、いまの平壤に楽浪郡を置いた。そして、この楽浪郡を中心として楽浪文化が栄え、東方諸民族に大きな影響をあたえるようになったのである。

これよりさき、中国では周王朝の後半期の春秋戦国時代に民族の移動がはげしくなり、政治・経済・社会・文化が

殊のほか発達した。有名な孔子、孟子が活躍したのもこの時代で、いわゆる百花争鳴という言葉で表されているような繁栄を誇ったのである。

周王朝の末期、いまの北京付近を中心として燕という国があった。周王朝の一族が封建された国であるが、この国の燕人はやくから東方へ進出していた。戦国時代の中国に明刀銭という刀の形をした銭が流通していたが、この銭が朝鮮でも日本でも発見されるのは、燕人がこの方面にまで足をのばしていた証拠である。

平壤には、かなりはやくから箕氏朝鮮国という国があったが、この国は秦の始皇帝が燕国を滅ぼしたとき、その亡命人の衛満というものにとって代られ、平壤に衛氏朝鮮国ができたのである。このことが燕人をいよいよ東方へ進出させたことは否めない。

秦は周朝を滅ぼして、かつてないほどの大帝國を建設した。北方の蛮族を防ぐために万里長城を築き、その東の端は鴨緑江を越えて朝鮮にまでのびていたといわれている。

しかし、その大土木工事と連年にわたる外征のために民心の反撃をうけ、まもなく滅亡する。そして秦末の大乱が東アジアに大きな影響をあたえたようである。

群雄が各地に蜂起し、天下は麻のごとくに乱れた。百姓は流亡四散し「天下秦に叛し、燕、斉、趙の民、地を朝鮮に避けるもの数万口なり」とか「いにしへの亡人、秦の役を避け、きたりて韓国にゆく」などと中国の古典に書かれているような状態が現出したのである。

衛氏朝鮮国も右渠という王のときになると、驕慢で漢王朝のことを聞かなくなり、さてこそ漢の武帝のために滅ぼされて、楽浪郡をはじめ四郡の設置となったのである。

話は多少前後するが、箕氏、衛氏の朝鮮国が滅んだとき、おおぜいの人が南走し、山谷に逃げこんだものもあったし、舟に乗って東の海にこぎだしたものもあった。

このころ、朝鮮半島の南部に新羅という国があった。その基になったのは辰韓であるが、辰韓はまた秦韓とも書く。中国の梁書新羅伝に「秦人なるゆえをもって秦韓と名づく。その言語・名物中国人に似たるあり」とのべている。これと関連して、朝鮮の三国史記という歴史書には「これよりさき、朝鮮の遺民、山谷の間に分居して六村をつくる。これを辰韓六部となす」と書いてある。この六村の人たちはばらばらに生活していたのではなかった。たがいに連帯感をもち、村々の行事は村長たちが川原の石の上で会議をして決めていたのである。それは、古事記や日本書紀でいう天の安川原で行われた八百万神の岩戸会議を思いおこせるのである。

4. 高天原はどこか

新羅の伝説でもう一ついうなら、その王は天から降りてきたと伝えられている。それどころか、新羅の王家朴・昔・金の二家までが倭（日本人）と関係があると書かれてい

る。新羅第一代王朴赫居世のとき瓠公という倭人が腰に瓠をさげて舟でやってきた。また、倭国の東北千里の多婆那国生まれの昔脱解が王になって瓠公を輔佐するというのである。

このあたり、スサノオノミコトが新羅のソシモリに行く話と一脈通ずるものがあるようである。

南鮮の洛東江下流に金海というところがある。ここは日本史でも有名な任那国のあったところであるが、三国遺事という朝鮮の古事記ともいべき本にはもっと興味ぶかい記事がある。

任那は大伽耶とも駕洛国ともよばれているが、この国の始祖に首露王という王がいた。三国遺事の記事は、この駕洛国の古い歴史書の駕洛国記を引用した開国説話である。

「駕洛に国号も君臣の称号もなかったころ、神天千、神鬼千らの九千（長）が人民を総領していた。人々は山野に住まいをし、井戸を掘って飲み、田を耕して平和に暮らしていた。後漢の光武帝の建武十八年三月の禊斎の日、亀旨峯にただならぬ声気がみなぎり、人々をよびよせた。二、三百人の人があつまったところ、姿をかくした神が、われあるところはいずこぞ、とよびかけたので、人々は亀旨峯ですとこたえた。すると、こんどは、皇天われに命ずるゆえんのものは、この処をおさめ、家邦を維新し、君后となれと、これがためにここに降ってきた、と宣り、ついで紫色の縄がするすると天からさがってきた。紫縄の下に金の椀があり、六個の卵がはいっていた。この卵が孵化して童子となったので、人々は床にすわらせて拝跪した。童子が即位して首露王となった」。

首露王説話はざっとこんなものだが、これとほとんど同じ話が新羅王にもあるし、なによりかより、日本の天孫降臨説話と形式がまったく同じなのである。首露王を祀った首露廟での祭のときには、この地方の人たちは河水で身をきよめて神霊の声をきいたのである。この祭儀は日本の祝詞の原初形式の一面を説明するものといわれている。

東大名誉教授の世界的考古学者江上波夫さんの騎馬民族説によると、駕洛（任那）は崇神天皇ミマキイリヒコのふるさとであり、まさしく高天が原なのである。

首露王が降臨した亀旨峯は朝鮮音でクシフルというが、天孫ニギノミコトも楳触に降臨したのである。

古事記には「筑紫の日向の高千穂の久士布流多気」とあり、日本書記には「筑紫の日向の高千穂の楳触峯」と書いてある。こうみえてくると、首露王説話もニギノミコトの天孫降臨説話ももとは同根であって、天孫降臨は日本だけのものではなかったのである。

さらに、ニギノミコトは高千穂峯に天降ったとき「この地は韓国にむかい笠沙のみさきにまきとおりて、朝日のさす国、夕日の照る国、ここぞいとよきところ」と詔りて宮柱太しくたてられた。高千穂峯は日本書記に「襲の高千穂峯」とも書かれているが、襲は楳触と同意語で、百済の

都の所夫里、新羅の蘇伐（徐伐）、現在の京城（ソウル）と同じく王都のことである。

このほか、日本の説話を朝鮮に捜せばいくらでもある。三国遺事にはヤタガラス説話、金鵄説話だってみられるのである。

5. 海流が主役

歴史はいうまでもなく自然・環境を舞台にして繰り広げられる。したがって、日本の民族・文化を考えるうえにこれは無視できない。そして、このばあい、日本の周辺を流れている海流が予想外に大きな役割をしているのである。

朝鮮海峡には、南から対馬暖流が北上しているが、北からは朝鮮半島の東岸に沿ってリマン寒流が南下している。この二つの海流は対馬の北でであり、その後はアベックで日本海を山陰海岸に沿って東北流している。山口県の北岸に立ってみると、このありさまがよくみられる。

この海流にのれば、朝鮮半島から日本へ来るのはいとも容易なのである。いまでも、朝鮮からの密航が山陰海岸に多いのはこのためである。

余談だが、山口県の北側、萩市のすぐ西に向津具半島が突きでている。ここに楊貴妃の墓というのがある。楊貴妃は唐の玄宗朝で三千の寵愛を一身にあつめたほどの美形だが、まさかかの女の墓がここにあるとは信じがたい。しかし、向津久半島が今も昔も密航者の最大の上陸地であってみれば、楊貴妃の墓もなんとなくわかるような気がするのである。

また、萩の東の江崎に通称磁石山がそそりたっているが、南鮮からの密航者はいまでもこの山をめざしてこぎよせるということである。

もう一つ余談をするなら、日本民族南方起源説というのがいまでも根づよく生きている。しかし、この説はわたくしにはあまり魅力がない。

なるほど、日本民族と南方諸民族のあいだには、数多くの民俗の共有点があるようだ。しかし、ただそれだけで両者を結びつけることは早計である。なぜなら、共通点のそれぞれが、よく研究されて、その後に両者を比較研究するという態度こそが歴史を研究するものにとっての要諦だからであって、はじめから似ているということだけを意識しすぎるのは危険である。

それに、こういうことが基底として考えられなければならない。北半球の民族はここ数千年間、一般的に南方へ向かって移動している。例えば、タイ民族だが、この民族はいまから千年ちかく前、中国の唐代には雲南省あたりにいて南詔国をつくっていたのである。ベトナムの諸民族のあいだには雪原をさまよった伝説もある。

おもしろいのは、雲南・貴州に現在住んでいる苗族のあいだに岩戸伝説とそっくり同じものがあることだ。この苗族は中国の古代には黄河流域にあり、漢代には楊子江の中

特別講演

流域の洞庭湖のあたりにいた。どうやら、岩戸伝説もアジア北部にあった説話のようにおもわれるのである。

南方から人が日本へやってきた記録は、ポルトガル人が種子島にきたのがはじめてである。日本民族の根幹となるほどのおおぜいの人がやってきたのだったら、古事記、日本書紀にもう少し現実的な記録があってもよさそうにおもわれるのである。

宮崎県の西都原古墳群を南方渡来民の拠点と考えるふうがかつてあった。しかし、あの古墳は朝鮮半島から伝わった形式であり、副葬の出土品もまたそうである。そして、まえに紹介した天孫降臨の穂触峯の麓にあるのだから、やはり朝鮮半島を経由してきた人々のものと考えるのがよいのではあるまいか。

朝鮮半島からやってくるばあい、海流に棹すのは容易だが、海流にさからうのはもちろんたいへん困難なことである。というのは、南鮮から九州北岸にくるには対馬暖流を斜めに横切らなければならないのである。わたくしにもその経験がある。中国の天津港を出発した3千トンの長安丸でさえ対馬暖流を直接横断するのは難しかったのである。

遣唐使というのが古代日本から唐朝へ派遣されたのは有名だが、遣唐使船が無事に大陸へたどりついたのはごくまれだったのである。

日本書紀に「天照大神はその生みたまえるイチキシマヒメノミコト、タゴリヒメノミコト、タギツヒメノミコトの三女神をもって筑紫州に天降らしめ、汝ら三神、道中に降りいまして天孫をたすけまつり、天孫のために祭られよ」と書いてあるが、三女神は海北道中、すなわち九州と南鮮のあいだに浮ぶ沖ノ島、大島、宗像に祭られている神である。いかに、南鮮から北九州にたどりつくのが困難であったかがわかるのである。

しかし、それにもかかわらず、この道を通ってもたくさんの人が南鮮から移住してきたのである。

6. 騎馬民族説について

江上波夫さんの騎馬民族説は、戦後の日本の歴史学界にぎわした一大学説である。誰がこれまでにこんなことを考えたであろうか。

この説にはロマンがある。日本人の源流は大陸の草原を駆けまわっていた騎馬民族だということである。ただし、この学説には賛否両論がうずまいた。とうぜんといえどとうぜんである。賛成者は主として東洋学者、反対者は国史学者である。

反対者の主張は、神武天皇（崇神天皇）が馬上りりしく部下をひきつれて海を渡ってきたという錯覚である。しかし、そうではない。馬に乗っていたのは昔のことである。騎馬の風習をもっていた民族という意味である。

紀元前6, 7世紀ごろ、満州の北部、ハルビンあたりを中心に夫余族というのがいた。この民族はいうまでもなく

騎馬民族である。このあたりにいた民族はすべて騎馬民族である。高句麗族も鮮卑族も、たぶんツングース系の騎馬草原民族なのである。

まえにものべたように、西方のスキタイ民族が活発に活動しはじめると、東アジアにいた草原民族も激しく移動するようになった。なかでも夫余族の移動は朝鮮半島の民族配置を一変させるほどの出来事であった。

夫余族は鴨緑江の中流域からも豆満江の方面からも朝鮮にはいつてきた。そして、まず今の京城（ソウル）あたりに居をかまえたのである。

はじめ、夫余族のうちの十部族ぐらいがやってきたようだ。その段階では十濟とよばれたが、その後ぞくぞく移住して、ついに百濟（クダラ）の基礎となった。百濟国の支配階級が夫余族で、被支配者は従来からの原住民と考えたらよい。

中国に三国志という歴史書がある。そのうちの魏志は山西省に国をつくっていた魏王朝の歴史を書いたもので、有名な魏志倭人伝もこのなかの一部である。この魏志に朝鮮半島のことを書いたのが魏志韓伝であるが、そのうち馬韓伝とよばれているものは、いまの京城以南の南鮮に住んでいた馬韓の人々の事情を伝えたものである。

ここは肥沃な農業地帯で、昔から中国人にとっても垂涎の地であった。史記・漢書などの古い中国の史書に「真番の利」という文字がみえているが、これはこのあたりの豊富な魚と塩をさしたものでらしい。真番とは漢の武帝がここに真番郡という郡を置いたこともあって、京城以南は真番とよばれていたのである。中国の王朝は、この豪族たちに伯・長・侯などのいろいろの官名をあたえて手なづけようとしていた。

真番の地には、百濟54国があった。そして、その王に辰王という王がいた。この王は流移の人と書いてあるところから、やはり他からここへ移住してきて王になったようである。そのころ、馬韓54国のそれぞれはそう強くなかったが、そのうちの一つの伯濟国に夫余族がはいつてきて馬韓統一の指導権を握ったのである。そして、紀元350年ごろに百濟国が建設された。

伯濟国に拠る百濟国建設とともに、流移の辰王も追われ、江上さんによると任那へはいつていったのであろうという。辰王とその一族は任那で勢力を蓄え、やがて日本へ渡ってきて、日本を統一し、崇神天皇になったという。崇神天皇はミマキイリヒコというが、ミマキは任那城の意だと江上さんはいつているが、この説はまだそうすんなりとは認められていない。

しかし、さきにものべたように、任那の首露王説話が天孫降臨説話と同じだったり、のちにここに日本府が置かれたりして、日本と長い間深い関係にあったことは間違いないようである。そうすると、江上さんのミマキイリヒコ説もむげには捨てがたいものがあるようである。

ともあれ、日本民族の大部分のものが、長い間に朝鮮半島から大波小波をなして、移住してきたことは間違いない。そして、人々はここに定着し、ルツボの中でこねあわされて、一個の日本民族、同じ言語を話し、同じ文化をもつ民族に仕上げられていったのである。

日本で国家の統一ができたのは紀元300年ごろといわれているが、それを成し遂げたのは崇神天皇である。ハツクニシラススメラミコという名称は崇神天皇にささげられたものであるが、それは、はじめて日本を統一した天皇という意味である。

神武天皇もまたハツクニシラススメラミコとよばれているが、それは、崇神天皇と二重写しになっているのであって、この二人の天皇が同一人物であるというのは学界の定説になっている。

7. 魏志倭人伝の世界

魏志倭人伝は、古代日本のことを書いた中国の記録のなかでも最も詳しいものである。これよりまえに、漢書地理志にも日本人が百余国に分れて国をつくり、中国の王朝へ朝貢していたことが記録してある。朝貢は主として楽浪郡を通じて行われていたし、楽浪郡が衰えてからは、その南いまのソウルあたりに置かれた帯方郡を通じてなされていた。

しかし、紀元後になると、日本にもそろそろ統一の気運がめばえてくるのである。それは、長い間中国と接して、その高い文化を身につけ、中国の国家をみて政治組織の点でも刺激されたからである。さらには、高い文化をもった人々が朝鮮からぞくぞく渡来してきたためである。

紀元57年、後漢の光武帝は倭奴国王に印綬をくれたことが後漢書にみえる「建武中元二年、倭奴国、貢をたてまつりて朝賀す。使人みずから大夫と称す。光武賜うに印綬をもってす」というのがそれである。この印については、江戸時代の天明四年(1784)に九州の博多湾の入口にある志賀島で発見された金印がそれだといわれている。金印には「漢委奴国王」という文字が彫ってある。この文字の読みかたについて「漢の委の奴の国王」というのと、「漢の委奴の国王」の二通りがある。わたくしは後者が正しいとおもっている。つまり、漢朝が委奴国王に金印をくれたのである。金印は、当時、漢朝が第一級の朝貢国にくれた印である。二級は銀印、三級は銅印である。いまのオリンピックのメダルと同じである。そうすると、委奴国は紀元前後の倭国(日本)を代表するだけの大国であったことになる。

まえにのべたが、日本へは朝鮮半島からたくさんの人が移住してきた。そして、九州に上陸したものは、大陸に近かったせいで、文化的にはやくめざめたと考えたい。そうすると、博多湾の沿岸に日本を代表する一個の統一国が生まれたとしても無理ではない。

この委奴国は、のちに魏志倭人伝に出てくる伊都国(怡土)の前身である。伊都国には盛衰があった。朝鮮からの渡来者でさらに高い文化を身につけた集団は、日本海から、あるいは瀬戸内海を東へすんで吉備(岡山県)、大和(奈良県)に、より強固な統一体をつくりはじめた。そして、紀元3世紀初めになると、奈良県の三輪山を中心に邪馬台国が生まれたのである。

邪馬台国には女王卑弥呼がいて、大和から九州まで29カ国を支配していた。この邪馬台国についての記事が魏志倭人伝なのである。

魏志倭人伝には、当時の日本の国々のこと、風俗習慣、産物そのほかのことが詳しく書かれてある。倭人伝の記事の基になったのは宮廷の日記である。ただし、日記の記録は、日本からの使者たちが語ったことだからかなり誤りが多いとみなければならない。というのは、九州から大和までの国々の配置など、そう詳しく心得ていたものはなかっただろうからである。女王卑弥呼のことについても、使者たちが聞き伝えをしゃべったにすぎない。

卑弥呼はヒノミコ、ヒメミコなどいろいろの解釈がある。天照大神を想像すればよいのではあるまいか。三輪山は日の神伝説の発祥地である。日本書記の編者も卑弥呼と天照大神を同一人と考えていたようである。

彼の女については「鬼道を事とし、よく衆を惑わす」と書いてあって、どうやらミコの性格が強かったことがわかる。ミコは北アジアに普遍的なシャーマニズム、つまり自然崇拜で神と人間の間を取り持つものである。いまでもこの種のミコは日本、朝鮮に強固に残っている。

ともあれ、ミコ性格の卑弥呼は29国に推戴されて、九州から大和までを支配していたのである。そして、その配下の国々の王たちに、中国からもらった鏡を分ちあたえたようである。その鏡が京都の椿井大塚山古墳、岡山の車塚、広島の中田古墳そのほかから出ている。三角縁神獣鏡というのがそれである。

卑弥呼女王は紀元248年に死んだ。そして、当時の人々を驚かすような大きな墓がつくられた。この墓は奈良県の箸墓古墳がそれだといわれている。ただし、あくまで推定である。発掘すれば、あるいは実証されるかも知れない。

卑弥呼女王が死ぬと、娘の甕与が女王となる。イヨはトヨ(台与)の誤りで、書紀のトヨスキリヒメがそうだとされている。彼女の女は、紀元275年に中国の晉朝に使者を派遣するが、その後、日本のことが中国の史書から姿を消してしまう。

たぶん、この間に邪馬台国が倒されて、日本の統一がなしとげられたのだろうといわれている。

統一の主役は崇神天皇ミマキイリヒコである。崇神天皇一族は新たに朝鮮から渡ってきた人たちで、かなり長いあいだ河内のあたりで勢力を蓄えていた。それがトヨの時代

特別講演

に大和に進撃し、三輪山の邪馬台国を倒して崇神王朝をたて、日本の統一を完成したのである。

トヨ女王はどうなったか。たぶん、彼の女は三輪山を逃げだし、一族の笠縫邑^{かさぬいのむら}に身をよせ、さらに志摩^{しま}にゆき三重県の五十鈴川のほとりに日の神の鏡を祀ったのではあるまいか。書紀にトヨスキイリヒメが現在の伊勢神宮をひらいたことが記してあるが、この一連の事件をさしているようにおもわれる。邪馬台国に斯馬国^{しきま}というのがあるが、これがシマ（志摩）であろう。

余談だが、崇神天皇の大和進撃が神武天皇の東征物語のもとではあるまいか。まえにのべたが、神武東征にでてくるヤタガラスの話も金鵒^{きんし}（トビ）も、この集団がかつて朝鮮半島にいたときにもっていた説話であろう。

8. 倭の五王

3世紀の終わり、日本のことが中国の史書から姿を消してから、次に現れるのは高句麗^{こうくり}好太王碑^{こうたい}である。この碑は朝鮮と満州の境を流れている鴨緑江^{おうりょくこう}の中流にいまでも立っている大きな石碑だが、そのなかに高句麗と日本とのあいだにすさまじい戦いのあったことが書いてある。紀元392年、日本軍は朝鮮半島を攻めのぼって、高句麗の都の平壤（ピョンヤン）にまで迫っているのである。

つまり、日本では紀元300年ごろに崇神天皇によって統一が完成されてから、100年経つたかたないうちに、朝鮮半島で、当時の最強国高句麗と覇を争うほどに強力になっていたのである。

ただし、この戦争は日本の敗戦に終わり、その後は南鮮のミマナを中心としてなお勢力を保持している。とくに百済を配下において、高句麗と対峙していたのである。

朝鮮半島で激しい戦いが繰りひろげられているあいだに、日本から中国の南朝の宋に使いが遣わされる。宋の歴史を書いた宋書に倭の五王のことがみえるのがそれで、その初めは紀元421年のことである。

倭の五王は讃^{さん}・珍^{ちん}・済^{せい}・興^{こう}・武^ぶの5人で、讃は仁徳天皇というのが通説になっている。使者を遣わしたのは、朝鮮半島での日本の支配権を認めてもらいたいというのである。しかし、宋もそう簡単には応じなかった。というのは、高句麗からも同じような要請がなされていたからである。

朝鮮での戦争はだんだん日本に不利になっていった。最後の武王（雄略天皇）は悲愴きわまりない国書を宋に奉っている。文章は六朝風のどうどうたるものだが、いうところは泣きおとしである。

高句麗はしかし、その後、中国の唐^{とう}と朝鮮の新羅^{しんら}の連合軍のために滅ぼされる。そして、日本軍が最後のよりどこ

ろにしていたミマナの日本府も欽明天皇^{きんめい}のときに新羅のために占領されて、朝鮮半島における日本の勢力はまったく一掃されてしまうのである。

長い、大陸との交渉にいちおう終止符がうたれるのである。

9. 飛鳥、奈良文化

大陸から民族と文化がたえず大波・小波となってうちよせたことはこれまで繰返し述べた。日本史で有名な物部氏^{ものべ}なども、もともと朝鮮からきたものといわれている。蘇我氏^{そが}もそうだろうし、大伴氏^{おおとも}、葛城氏^{かつらぎ}なども例外ではあるまい。

かれらは、朝廷にあつて外交・文書をつかさどり、支配層にのしあがっていくのである。奈良県天理市に石上神宮^{いものかみ}というのがあるが、これは物部氏の社である。ここに百済王が朝廷に奉った七支刀^{ひちしとう}という七本の枝の出た矛がいまでも保存されている。

なぜ、七本の枝が出ているのか。これこそ朝鮮七道（朝鮮全土）を象徴しているとみたい。倭の五王が宋の朝廷に七国大將軍の称号を執拗に要求したのと考えあわせ興味^{そが}がふかい。百済は日本の援助をうけていたから、あなたこそ朝鮮七道の王ですよと七支刀を奉ったのであろう。

しかし、戦いは敗れた。そのあとになにが残ったか。

長い大陸との交渉でえた文化が日本島で実を結んだのである。

日本島はルツボだと前にのべた。民族も文化もスポンジのように吸いこみ、ここでこねあげられて、新しい民族と文化を生みだしたのである。

それが日本人であり、飛鳥・奈良文化なのである。日本には北から南まで言語・風俗を一にする日本人が住んでいる。多少の違いは、言葉の訛^{なまり}・方言にすぎず、基本的には全く同じなのである。

文化の点でも、そうである。このルツボの中からは新しいものがたえず生みだされていく。例えば、平安時代になって現われてくるカナ文字、カナ文学がそうであり、日本文化の一つの特色であるワビ、サビといったものも他に類例がない。

最後にもう一つ余談をのべるなら、今日でも百済とか新羅といった地名が各地に残っている。高麗^{こうらい}というのものもある。それは朝鮮からの移住の名残りである。

ただし、朝鮮半島の住民はたえず北から補充され、南へ押し出されていくから、現代の朝鮮人と日本人は厳密には同祖ではないことをつけくわえておきたい。

（原稿受理 1980. 7. 7）